

## 次世代自動車センター浜松 活動レポート Vol. 364

### ■ 最新E V試乗ベンチマーク活動（会員限定）

次世代自動車センター浜松では、会員企業の皆様による次世代自動車部品製造へのチャレンジを支援するため、これまで、最新E Vに関する分解調査活動や部品ベンチマークルーム設置等を実施しています。

今年度からは、新たに、会員企業の皆様が、最新E Vを肌で感じていただき、次世代自動車へ対応するための調査や研究の一環としてお役立ていただくため、最新E Vを市中で試乗ベンチマークしていただく事業を開始しました。

試乗用として用意した車両は、4月から「BYD SEALION 7 AWD」（12月から「RACCO」）、5月からは「SUZUKI eVITARA 4WD」の2台で比較試乗を実施しました。

■日 時： 2026年4月～2027年3月

■場 所： 浜松市内ルート

■参加者： 25社／52名（7月31日時点）

<SUZUKI eVITARA 試乗>



<BYD SEALION7 試乗>



<運転免許証確認・アルコール検査・>



<試乗コース確認>



## 【参加者の声】（2026/4～6月）

- ・初めてEVを試乗してみて静かさ、パワフルさなどガソリン車との違いを鮮明に感じる事ができた。
- ・想像を超える加速、高速での静寂性が非常に高い印象だった。
- ・クリープの再現やアクセルオフ時の自然な回生など、ガソリン車から乗り換えても全く違和感のない走行性となっていることに驚いた。充電インフラなどの課題が解消されれば、一気に需要が増加する可能性を肌で感じる事ができ、大変有意義だった。
- ・BYDに試乗したが、加速が良く乗り心地も軽快でびっくりした。また、外観もよかったが、内装の質感やデザインも日本車と違い、おしゃれな印象を受けた。中国車が市場に受け入れられている理由が納得できた。
- ・Sprouts・標準・ecoモードの違いで、出だしの違いが体感できた。アクセルによる回生ブレーキ、坂道のブレーキについては各社あるので共通の表現方法がないことがわかった。やはりロードノイズは走行中、ずっと聞こえた。
- ・エンジンが付いていない分、車内が静かで、走行中は風切り音、雨が弾く音やタイヤのロードノイズが気になった程であった。
- ・回生ブレーキの味付けの違いや、ワンペダル走行が電費悪化につながることで最近は無くなっていることなど、乗り味についても内燃エンジン車に近づいた制御が主流となっていることがわかった。BYDはPブレーキの操作不要で走行できるなど痒いところに手が届く設定も用意されており、運転手順の簡素化とPブレーキ引き忘れがないよう安全面にも配慮されている点良かった。BYDの車作りのレベルの高さに驚いた。
- ・EVの運転は初めてだったため、ガソリン車/HV車との違いを知ることができた。自社製品が採用されている車とされていない車の比較をすることができ、優位点、劣っている点を肌で感じる事ができた。
- ・EV車のトルク特性、音振レベルの快適性はガソリン車にはない魅力あり。日本車と中国車の乗り味比較では日常レベルでは全く支障がないレベルに仕上がっている。BYDのほうが電費にすぐれており効率が良かった。
- ・中国等のお客様の購買意欲を駆り立てる要素が多い一方で、長期的な保有には課題があるように感じた。上質感を感じるプレミアムSUVセグメントにおけるコストパフォーマンスの良さ、ドライバインフォメーションディスプレイ、中央タッチパネルが未来的で格好良いことに対して、発進加速、回生含めた減速フィーリング、乗心地がとても悪いなど乗車体験が洗練されていない、航続距離が思ったより良くない。
- ・車両としての乗り味、EVとしての乗り味、中国メーカーとしての乗り味等、市場に受け入れられるレベルを理解できた。
- ・加速や走行時の静粛性、走る・曲がる・止まるという走行性能はかなり良いことがわかった（グローバルスタンダードに十分到達している）。加速性能は、日本ではオーバースペックと感じる。特に、カメラ技術・走行サポート技術が優れていることがわかった。前後サスペンションにアルミ部品が使用され、コストだけでなく軽量化も考慮していることがわかった。
- ・EVの特徴（加速感、車体重量増による操作感・剛性感等々）を街中試乗でわかる範囲で把握することができた。また、中国の技術力の高さも侮れない領域に達していることも同時に理解した。
- ・BYDに試乗したが、価格に対して十分な機能を備えていると感じた。また、EVはもれなく重量が重く運動性能にネガティブな要素を抱えがちだが、車体の動きは問題なく作りなれていると感じた。一方、システム面も含め細かい作りこみの部分では粗さもあるため日本車が戦えるうちにEVの分野で開発をしていく重要性を感じた。